武装蜂起の勝利の条件

政　治　情　勢*

（四つのテーゼ）

……（青山略）

三　ロシア革命の平和的発展にたいするいっさいの期待は、完全に消えうせてしまった。軍事的独裁が徹底的に勝利するか、それとも労働者の武装蜂起が勝利するか――これが客観的情勢である。労働者の武装蜂起の勝利は、武装蜂起が、経済的崩壊と戦争の長期化を原因として政府とブルジョアジーに反対する大衆のいちじるしい盛りあがりと時を同じくするばあいに、はじめて可能である。

全権力をソヴェトに移せというスローガンは、革命を平和的に発展させるためのスローガンであって、この平和的な発展は、四月、五月、六月、七月五～九日まで、すなわち実際の権力が軍事的独裁の手に移るまでは可能であった。いまではこのスローガンはもはや正しくない。なぜなら、それは、このように権力の移行がおこなわれ、現にエス・エルとメンシェヴィキが革命を完全に裏切ったことを考慮にいれていないからである。役にたつことができるのは、冒険でも、一揆でも、部分的な抵抗でも、反動に対抗しようとする部分的なむなしい企てでもなく、労働者の前衛が情勢をはっきりと理解し、堅忍不抜の毅然たる態度をとることだけであり、武装蜂起の勢力を準備することだけである。そして武装蜂起が勝利する条件は、いまではおそろしく困難であるが、それにしても、このテーゼの本文中に指摘した諸事実と諸潮流が時を同じくするばあいには、可能である。どのような立憲的および共和主義的幻想も、今後の平和な道を夢みる幻想も、各個ばらばらの行動も、けっしてあってはならず、いま黒百人組とカザックの挑発にのってはならず、力を結集し、それを再組織すべきであり、危機が進行して真に大衆的、全人民的な規模で武装蜂起をおこないうるときにそなえて、しっかりと武装蜂起の準備をととのえなければならない。土地を農民の手に移すことは、いまでは武装蜂起なしには不可能である。なぜなら、権力をにぎった反革命派は、階級としての地主と完全に一体になったからである。

わが党の綱領を実現するために、貧農に支持されたプロレタリアートの手に権力を移すことだけが、武装蜂起の目標となることができる。

四　労働者階級の党は、合法性を放棄しないが、一瞬もそれを過大評価せず、1912 ～ 1914 年と同様に、合法活動を非合法活動と結合しなければならない。

一時間も合法活動を放棄してはならない。だが、立憲的幻想や「平和」の幻想を、すこしでも信じてはならない。リーフレットその他を発行するための非合法組織あるいは細胞を、ただちに、いたるところに、あまねくつくらなければならない。ただちに、忍耐づよく、毅然として、全線にわたって、組織がえをおこなえ。

国会、保険組合、労働組合など、どこでも合法的基盤を失うことなしに、革命と武装蜂起によるツァーリズムの打倒について語ることができた、1912 ～ 1914 年と同様に行動せよ。

＊　このテーゼは 1917 年 6 月 10(23) 日に書かれ、6 月 13 － 14(26 － 27) 日にひらかれた党中央委員会とペトログラード委員会、ペトログラード軍隊内組織、モスクワ地方ビューロー、モスクワ委員会と

モスクワ州委員会の各代表との拡大会議で審議された。

テーゼは、『政治的気分』という表題で論文のかたちで、1917 年 8 月 2 日(7 月 20 日)の『プロレタールスコエ・デーロ（クロンシタット労働者・兵士代表ソヴェト・ボリシェヴィキ代議員団の機関紙）に発表された。同紙は、7 月に政府によって閉鎖された『ゴーロス・プラウドィ』(『真理の声』) の代わりに出ていた。［事項訳注 P681］

第41巻『政治情勢』P563～565　1917 年 7 月 10(23) 日に執筆

手稿によって印刷　署名――W

1917 年八月二日(7 月 20 日)、新聞『プロレタールスコエ・デーロ』第六号に発表